

新修 豊田市史だより

第16号



矢作川河床の井戸状遺構(畝部東町)

遺跡から見た矢作川と人々の関係史

市史の編さん事業に関わる調査によって、過去の人々が矢作川とどのように関わってきたのかということが徐々に明らかになってきました。ここでは、その成果の一端について豊田市南西部の遺跡と周辺の景観に注目しながら述べたいと思います。

矢作川が貫流する三河高原の大半を構成するのは、主に花崗岩類（かこうがん）です。本来、花崗岩は非常に硬いのですが、風化作用（岩石が太陽光や風雨にさらされることによって物理的・科学的に変質する）を受けるともろくなり、それによって生じた大量の「マサ」は河川を介して下流部に運搬されます。矢作川は三河高原の出口である勘八峡に至ると、その下流部に平野をかたちづくります。三河平野と呼ばれる地形で、地質は先に述べたマサを主とした砂礫によって構成されています。この平野は、更新世の段丘群（約二五八万年前から約一万年前までの期間に、矢作川の堆積・侵食によって形成された地形、いわゆる台地で、標高の高いものから挙母面・碧海面・越戸面・籠川面と呼ばれる）が大半を占めますが、現在の矢作川沿いには幅数キロメートルにわたって沖積平野（約二万年前以降にできた新しい地形、いわゆる低地で、洪水の影響を受けやすい範囲）が広がっており、豊田市街地の大半もここに広がっています。

矢作川の沖積平野は、その面積こそ狭いものの古くから人々に利用されてきました。最も古くて確実な生活痕が残されているのは、現在の豊田JCT付近に立地していた本川遺跡や川原遺跡で、これらの遺跡からは縄文時代晩期（約二〇〇〇～二四〇〇年前）の土坑や土器が出土しています。また約四〇〇〇～三〇〇〇年前には、現在の豊田スタジアムの北側に位置する寺部遺跡で堅果類（コナラ亜属果実、アカガシ亜属果実、トチノキ種子など）を貯

蔵した大量のピットが検出されています（写真1）。さらに、現在の東名高速道路の矢作橋から県道二三九号線の天神橋までの約二キロメートルの範囲には「矢作川河床埋没林」と呼ばれる古代の森林が確認されていますが、森林が繁茂していたのは約三〇〇〇年前を中心とした三〇〇～四〇〇年間とされています。この森林を構成していたのはコナラ属コナラ節、クワ属、クリ、ムクノキ、ヒサカキ、ムクロジなどで、なかでもコナラ属、クワ属、クリが全体の約七〇パーセントを占める落葉広葉樹林です。したがって、このころの沖積平野では比較的洪水の少ない安定した地形環境の下で、豊かな落葉広葉樹林を利用して人々が居住していた可能性が高いと考えられます。

その後、沖積平野における人々の活動の活発化は、弥生時代中期中葉（約二一〇〇年前）に認められます。当時、川原遺跡では多数の堅穴建物や方形周溝墓がつくられたり、その約一〇キロメートル下流側に位置する鹿乗川流域遺跡群（安城市）においても大量の遺構や遺物が見つかったりしています。

このように矢作川の沖積平野では、弥生時代中期に入ると多くの集落の立地が認められるようになりますが、それらの大半は後期まで存続しません。その理由としては、河川の氾濫と連動している可能性が考古学者によって示されています。なお「二〇〇〇年前洪水」は、矢作川の沖積平野以外（例えば濃尾平野）でも確認されており、興味深いテーマです。

古墳時代以後、現在の豊田JCT付近に立地する天神前遺跡や郷



写真1 堅果類の貯蔵穴（寺部遺跡）

上遺跡では大溝が掘られたり、鹿乗川流域遺跡群では八ッ塚古墳、楠塚古墳が造営されたりと、沖積平野の大規模な開発が積極的に進められたことが明らかになっています。

その後、古代〜中世の沖積平野における生活の痕跡としては、矢作川河床遺跡群から検出された井戸状遺構があげられます。同遺跡群は豊田市南部から岡崎市南部までの約一〇キロメートルに及び、古代から中世の遺物が出土していますが、それらとともに計九基の井戸状遺構が見つかっています。そのうち、最も古いものは一二世紀後葉から一三世紀にかけてのもので、ほかには中世が中心であると考えられています。河床に井戸が掘られる必要は無いことから、井戸が掘られた当時には周辺に集落が存在し、そこは河川から離れた氾濫原であったと推測されます。その後、矢作川の蛇行や転流によって洪水堆積物が流入し、集落は埋積され放棄されたと考えるのが妥当でしょう。先に述べたように、矢作川下流部には上流の山地から大量のマサが流入しますが、沖積平野の幅は狭いです。そのため、河川が蛇行や転流を頻繁に繰り返したことが旧河道や自然堤防の複雑な配列状況から推察されます。

しかし、中世末以降になると矢作川の河道は固定され、現在のように堤防で固定された河川となります。その結果、沖積平野の新田開発は進みましたが、堤外地に土砂が堆積し、天井川化が進行しました。河道の固定から一〇〇年ほど経った一八世紀ごろになると、沖積平野で洪水が頻発するようになります。宝暦六年（一七五六）、豊田盆地において挙母藩による桜城の築城が始まりましたが、度重なる洪水のため城内は何度も浸水しました。工事が進まなかったため、低地での築城を諦め、安永八年（一七七九）に台地上への城の移転を幕府に願い出て、天明五年（一七八五）に新たな城が完成しました。また、「高地移転」は下流の村落でも生じたことが知られています。碧海郡粟寺村・馬場村では度々水難にあったので元禄一二年（一六九九）に全戸が背後の丘陵地に移り、幡豆郡新村においても度重なる洪水を避けるために安永九年（一七八〇）に全村民が背後の丘陵上に移転する総屋敷替えがおこなわ

れました。

当時における矢作川の天井川化の激しさは、かつて台地上に立地していた水入遺跡（渡刈町）に見られます。沖積平野を眼下に置く水入遺跡は、旧石器時代から江戸時代後半まで営まれた複合遺跡です。矢作川の築堤が始まる以前、平野との比高は二〜三メートル程度でしたが、近世の築堤によってその差は急速に減少し、やがて堤外地へと組み込まれ、遺跡は廃絶しました。台地を覆う天井川堆積物はシルト〜極粗粒砂で、層厚は四メートルを超えます。

近世における大河川の固定化は新田開発の進行と破堤洪水の多発という二つの現象を生みました。そうしたなかで、矢作川の沖積平野に特有な地形条件に起因する人々の行動が認められます。先に述べた、平野の居住環境の悪化にともなう「高地移転」です。周囲を段丘や丘陵に限られた狭小な沖積低地というコンパクトな生活空間において、人々はそれぞれの空間を比較的柔軟に使い分けていたことが遺跡の分布状況から推測できます。弥生時代に生じた平野の地形環境の悪化（洪水の多発）の際には、平野に接した台地上に集落が増加したという報告もあり、環境要因を反映した高低移動が歴史的に繰り返されてきた可能性もあります。

今後、矢作川の本流が破堤する可能性は少ないですが、その支流が引き起こす内水氾濫については対策を考えていかなければなりません。沖積平野の形成以来、人々はそのに住み、自然の恩恵を受けながらも洪水のリスクと隣り合わせに時を送ってきました。埋没した遺跡から、我々はその土地の履歴を学び、それを生かして住まうという姿勢が必要なのではないでしょうか。なお本稿は、古今書院から出版が予定されている書籍『微地形学』（藤本潔・宮城豊彦・西城潔・竹内裕希子編）のために執筆した原稿の内容の一部を改変して、まとめたものです。

（自然部会 執筆協力員 小野映介）

敗戦後の市内における「ラジオニデイ新聞・雑誌

敗戦直後の日本では、新聞や雑誌などが多数発行されます。その数は「史上空前」であったともいわれています（山本武利監修『占領期生活世相誌資料Ⅰ』新曜社、二〇一四年など）。なぜ、それほどまでの数の新聞や雑誌が発行されたのでしょうか。

アジア・太平洋戦争は人々に多くの制限を強い、彼ら彼女らの欲求は抑圧されてきました。敗戦はそうした彼ら彼女らの意識を解放へと向かわせるものだったのです。戦前の軍国主義からの脱却は、彼ら彼女らに喜び・開放感をもたらします。人々はその気持ちをメディアに吐露することを希望したのです。そして、敗戦直後には多くの新聞や雑誌などが発行されました。しかもそれは大手の新聞社や出版社だけではなく、地域に密着した新聞（現在の言葉で言えば、タウン紙と呼ばれるものかもしれませんが）が発行されたほか、各地の青年団や俳句・和歌や小説などの文芸サークル、学校や労働組合などの単位でも新聞や雑誌が発行されます。つまり、人々は自分たちが発行するメディアに、自身の気持ちを自由に掲載することを望んだともいえます。だからこそ、敗戦直後の経済的には決して余裕のない状況の中で、「史上空前」の数の新聞・雑誌の発行があったのです。

占領軍（GHQ）は戦前日本の軍国主義を否定しつつも、自身の占領政策に對して否定的な意見を取り締まることを目的に、大メディアには事前検閲制を、小メディアには事後検閲制を敷きました。検閲対象は図書・新聞・雑誌などで、前述の地域やサークル単位で発行された新聞・雑誌も、その範囲となりました。検閲を担当したGHQのCIS（民間課報局）傘下にあったCCD（民事検閲局）は全国に支部を持つており、それぞれのメディアに活動内容を届け出させ、その新聞・雑誌を一九四九年（昭和二十四）一〇月まで検

閲しました。「史上空前」の規模で発行されていた新聞・雑誌は、くまなく検閲の対象になっていたのです。

GHQに務めていたゴードン・W・プランゲは、その史料的价值に注目し、母校のメリーランド大学に帰任する際、図書・新聞・雑誌などを持ち帰ります。この史料群が、現在「プランゲ文庫」と呼ばれてメリーランド大学の図書館に所蔵されています。新聞は約一万八〇〇〇タイトル、雑誌は約一万三八〇〇タイトルを所蔵しており、その中には日本の公共図書館では所蔵していないものもあります。つまり、プランゲ文庫でしかその新聞・雑誌を見ることができないこともあるのです。現在、プランゲ文庫は東京の国立国会図書館や愛知県図書館（県内発行分）などで、マイクロフィッシュの形によって閲覧することができま

す。現在の市内でも、敗戦直後には多くの新聞・雑誌が発行されていました。例えば挙母町で一九四九年五月に創刊された『挙母タイムス』は、挙母町政に関する記事（税金問題や町の集会など）、西加茂郡の農業や教育に関する記事などで構成された新聞でした。発行人の中根文治による「創刊の辞」には、「新聞の使命たる文化の向上」を目指し、「政党政治を超越し、あくまで、是々非々主義をモットーに正しいニュースと明るい話題で紙面を構成」することを創刊の目的として掲げています。大新聞ではほとんど書かれることのない、挙母町に住む人々にとって身近な記



『群星』（第2巻第8号第10輯）表紙
（日本近代文学館所蔵）

事を多数掲載する新聞として、存在感を出そうとしたのでしよう。それは、敗戦後の民主主義の中で自治意識が高まった人々に対して、町政を判断する材料を提供する媒体だったともいえます。

学校などでも新聞が発行されました。愛知県立加茂高等学校(現在の愛知県立豊田西高等学校)の新聞クラブが発行した『加茂字報』は、校内の様々なニュースで構成されています。一九四九年八月八日に発行された紙面には、「男女共学について」という生徒へのアンケートの結果が掲載されています。「男女共学は楽しく受けられるか」の問いに、受けられると答えたのは男子学生九パーセント・女子学生三三パーセント、受けられないと答えたのは男子学生五四パーセント・女子学生六三パーセント、わからないのは男子学生三七パーセント・女子学生四パーセントで、男子学生の方が男女共学に戸惑っている様子がわかります。ここからは、敗戦後の学制改革によって男女共学一期生となった高校生たちの意識を感じ取ることができます。このように彼女らの生の声により直接的に伝わってくるのも、彼女ららの身近で発行された新聞だからこそといえるかもしれません。

そのほかにも、トヨタ自動車付属の寄宿舎自治会機関紙『若人』などもブラング文庫には残っています。そこには、寄宿生たちの生活ぶりや自治会行事、若く親元を離れて仕事に取り組みながら悩む姿などが描き出されていて、敗戦直後の人々の息づかいが伝わってきます。

敗戦後には、サークル雑誌も多数発行されました。高岡村若林で発行されていた『群星』を例にとってみましょう。その雑誌には、評論や小説、詩や俳句・短歌などが毎号掲載されていました。それは一種の総合的文芸雑誌の趣を持っています。この中で「新人よ！出でよ！本誌は貴方の作品に期待してゐるのです」と呼びかけられたように、『群星』は基本的には読者の投稿で成り立っていた雑誌でした。

また一定の条件をクリアすれば、同人・準同人、誌友になることができたようです。そして、同人や誌友の投稿は審査なしに掲載されたことが規定に

は書かれています。編集部は、誌友がある程度以上集まった支部の新設を求め、それぞれの支部から投稿されるように希望していました。つまり、『群星』は編集部の依頼によって作品が掲載される雑誌ではなく、地域において人々が自主的に文芸サークルとしての活動をおこない、その成果を掲載する雑誌だったことがわかります。

掲載されている作品の多くには筆者の名前と居住地が記載されており、それを見ると、地域は西加茂郡や東加茂郡などにとどまらず、名古屋や岐阜・長野からも投稿があったことがわかります。かなり広範な地域に『群星』は浸透していたのでしよう。そのような雑誌が名古屋や豊橋のような都心部ではなく、高岡という地域で発行されていたのです。『群星』の中の「こんな片田舎でこんな雑誌が長くつゝいたことはないと聞く」という文言からは、地域の文化を担う雑誌としての自負心のような感情も読み取ることができないでしょうか。

また『群星』に掲載された作品を読んでもみると、投稿者たちが文芸を楽しむことができるようになったことを喜んでる姿が感じられます。敗戦後、それまでの戦争中心の体制から解放されることによって、人々は民主主義を謳歌し、文化的な取り組みにも積極的に参加していきます。そのように変化した社会を歓迎し、彼らは作品を作っては投稿していったのです。地域における文芸サークルはまさにその典型的な姿ともいえます。『群星』はその活動を象徴する雑誌でした。

このようにプランク文庫に残された新聞・雑誌からは、敗戦直後の市内の人々の状況や暮らし、思想が伝わってくるのです。

(近代部会 執筆委員 河西秀哉)

活動記録

(平成27年1月～6月)

1月

- 10日 原始部会資料編Ⅱ写真撮影
 - 11日 原始部会資料編Ⅱ写真撮影
 - 13日 原始部会資料編Ⅱ写真撮影
 - 15日 古代・中世部会資料調査(高橋)
 - 16日 美術・工芸部会典籍分野資料調査
 - 17日 原始部会資料編Ⅱ写真撮影
 - 22日 古代・中世部会資料調査(高橋)
 - 24日 古代・中世部会(第31回)
 - 25日 近世部会(第38回)
 - 25日 建築部会(第29回)
 - 27日 自然部会水文調査(雨水)
 - 30日 民俗部会別編Ⅱ読合せ
- ## 2月
- 3日 民俗部会写真撮影(～4日)
 - 6日 自然部会昆虫標本調査(旭)
 - 7日 民俗部会写真撮影
 - 7日 自然部会第6回生物執筆者検討会
 - 9日 民俗部会別編Ⅱ編集会議
 - 11日 自然部会昆虫類検討会
 - 16日 民俗部会写真撮影
 - 17日 近世部会資料編Ⅱ口絵写真撮影
 - 18日 民俗部会写真撮影(～19日)
 - 20日 古代・中世部会、原始部会合同墨書土器
積文調査

- 22日 現代部会(第28回)、資料調査(挙母)
- 24日 古代・中世部会資料調査
(岡崎市美術博物館)

3月

- 26日 古代・中世部会資料調査(石野)
- 27日 第25回生物調査検討会
- 7日 専門委員会(第33回)、自然部会(第31回)
- 7日 近代部会資料調査(岩瀬文庫)
- 8日 近世部会(第39回)
- 8日 原始部会資料編Ⅱ写真撮影
- 10日 現地調査(猿投)
- 14日 近代部会資料調査(～15日、稲武)
- 15日 原始部会(第37回)
- 17日 民俗部会写真撮影
- 19日 古代・中世部会写真撮影
- 22日 民俗部会別編Ⅱ編集会議
- 25日 美術・工芸部会典籍分野資料調査
- 26日 近代部会(第25回)、資料調査(～27日)
- 27日 美術・工芸部会典籍分野資料調査
- 27日 古代・中世部会、原始部会合同墨書土器
積文調査(名古屋大学)
- 30日 古代・中世部会(第32回)
- 31日 自然部会湿地調査(雨水)
- 4月
- 2日 自然部会気象調査(年輪調査)
- 8日 自然部会気象調査(年輪調査)
- 9日 美術・工芸部会典籍分野資料調査

- 19日 建築部会編集会議
- 22日 自然部会写真撮影
- 25日 原始部会資料編Ⅲ読合せ

5月

- 14日 美術・工芸部会典籍分野資料調査
(～15日、保見)
- 17日 原始部会資料編Ⅲ読合せ

6月

- 5日 建築部会写真撮影(足助)
- 13日 自然部会(第32回)
- 20日 原始部会(第38回)
- 21日 近世部会(第40回)
- 28日 原始部会資料編Ⅲ読合せ

- 原始部会資料調査 12回
- 近世部会・近代部会定例調査 毎月
- 近世部会資料調査 8回
- 現代部会資料編Ⅰ原稿校正 15回
- 自然部会生物調査 301回
- 民俗部会個別調査 13回
- 民俗部会別編Ⅱ原稿校正 5回
- 建築部会現地調査 17回

『市史研究』第六号刊行案内

『豊田市史研究』第六号を、平成二十七年三月に刊行しました。

A4判、一八六頁で、論文五編(南北朝期の中条氏について／稲武地域における学区制の確立／人為の変化と生物相／気候変動に伴う豊田市の暑さの現状と課題／豊田市川原遺跡出土打製石鏃について／西三河地域における弥生時代打製石鏃の様相)、研究ノート三編(近世の在家・出家と朝廷文書の所持／有畜農家創設事業とその展開／一九五〇年代後半の東加茂郡足助町を事例に／郷上遺跡の再検討―掘立柱建物跡の復元を中心に―)、資料紹介二編(半ノ木遺跡群とその縄文時代遺物)です。

購入希望の方は、市史編さん室までお問い合わせください(販売価格五〇〇円)。

豊田市史研究			
第6号			
目次			
総論			
編者			
高田原の中条氏について	高橋 第一	1	
稲武地域における学区制の確立	吉岡 浩治	21	
人為の変化と生物相	林 暁	140 (2)	
気候変動に伴う豊田市の暑さの現状と課題	大和田謙彦	164 (2)	
豊田川原遺跡出土打製石鏃について	川原 花穂	186 (1)	
研究ノート			
富家の家系、近世と戦国文書の再考	渡部 聖夫	43	
有畜農家創設事業とその展開	高木 博和	98 (2)	
1950年代後半の東加茂郡足助町を事例に	高木 博和	98 (2)	
郷上遺跡の再検討	阪本 正章	118 (1)	
「掘立柱建物跡の復元を中心」			
資料紹介			
半ノ木遺跡群とその縄文時代遺物	川原 花穂	122 (1)	
別編			
豊田市の歴史と文化			27
豊田市の歴史と文化			22
平成27年3月			
豊 田 市			

『新修豊田市史』平成二十七年(第五回配本)

刊行予定の案内

(平成二十八年六月中旬配本予定)

資料編 近世Ⅱ

挙母・高橋・上郷・高岡・猿投

菊判 予定価格：四〇〇〇円

総合解説

第一章 領主の支配 第二章 土地と山野

第三章 家と村 第四章 災害

第五章 産業 第六章 社会

第七章 寺院と神社 第八章 文化

第九章 豪農寺田家 解説／資料群解説

資料編 近代Ⅰ

菊判 予定価格：四〇〇〇円

一 政治・行政 二 産業・経済

三 教育 四 宗教と文化

解説

別編 建築

A4判 予定価格：四五〇〇円

第一章 総論 第二章 寺院

第三章 神社 第四章 民家・町並み

第五章 住宅・書院・茶室

第六章 山車・舞台 第七章 近代建築

第八章 近代化遺産

好評発売中(既刊市史)

新修豊田市史概要版『豊田市のあゆみ』

B5判 販売価格：二二〇〇円

資料編 考古Ⅰ 旧石器・縄文

別編 美術・工芸

A4判 販売価格：四五〇〇円

資料編 近世Ⅰ 藤岡・小原・旭・稲武

別編 民俗Ⅰ 山地のくらし

菊判 販売価格：四〇〇〇円

●刊行市史の購入について●

左記の施設などでお買い求めください。

【販売施設など】

市史編さん室(陣中町)

郷土資料館(陣中町)

民芸館(平戸橋町)

近代の産業とくらし発見館(喜多町)

中央図書館(西町)

市内一部書店

『新修豊田市史』刊行案内

平成二十七年六月に第四回配本として『資料編 考古Ⅱ』、『資料編 現代Ⅰ』、『別編 民俗Ⅱ』の販売を開始しました。フルカラーの『新修豊田市史』をぜひ一度お手にとってご覧ください。

資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳

A4判 販売価格：四五〇〇円

- 第一章 総論
- 第二章 主要遺跡解説
- 第三章 主要古墳解説
- 第四章 集成・特論

資料編 現代Ⅰ

菊判 販売価格：四〇〇〇円

- 第一章 拡大する市域と人口
- 第二章 平地農村の都市化と都市農業の展開
- 第三章 山間地域における第一次産業の展開
- 第四章 世界に伸びる工業
- 第五章 商業・サービスの展開

別編 民俗Ⅱ 平地のくらし

菊判 販売価格：四〇〇〇円

- 第一章 総論
- 第二章 生業
- 第三章 衣生活
- 第四章 食生活
- 第五章 住生活
- 第六章 社会生活
- 第七章 人の一生
- 第八章 年中行事
- 第九章 信仰



『新修豊田市史』刊行にともなう

市史講座開催のお知らせ

新たに刊行しました新修豊田市史『資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』、『資料編 現代Ⅰ』、『別編 民俗Ⅱ 平地のくらし』の編さん事業の中で収集した資料や調査の成果などを、市民の皆さんに広く提供することを目的に、市史講座(入場無料・申し込み不要)を左記の日程で開催します。

『広報とよた』や市史編さん室のホームページなどでもご案内しています。皆さんのお越しをお待ちしております。

第十七回 弥生・古墳時代の豊田

日時 八月二日(日)

午後一時三〇分～四時三〇分

会場 崇化館交流館 二階 大会議室

講師・演題

川崎 みどり 氏(原始部会執筆協力員)

「豊田市の弥生時代集落の展開」

加藤 安信 氏(原始部会部会長)

「手呂銅鐸と弥生人の祈り」

森 泰通 氏(原始部会執筆委員)

「古墳からみえる古代の豊田」

〈座談会『資料編 考古Ⅱ 弥生・古墳』を

作成して

定員 六〇名

第十八回 平地の農業と山の講

日時 九月六日(日) 午後一時三〇分～四時

会場 若林交流館 二階 大会議室

講師・演題

伊藤 貴啓 氏(現代部会執筆委員)

「農とその風景の変容 ― 豊田市平地農村の七〇年 ―」

大野 麻子 氏(民俗部会執筆委員)

「豊田市域平野部の山の講」

定員 六〇名

第十九回 豊田の工業と食

日時 十月二十五日(日)午後一時三〇分～四時

会場 豊田市中央図書館 七階 会議室

講師・演題

北川 博史 氏(現代部会執筆協力員)

「工業都市豊田の地域的特徴」

小早川 道子 氏(民俗部会執筆委員)

「豊田の食」

定員 六〇名

『新修豊田市史』だより』第16号

平成二十七年七月発行

豊田市教育委員会

文化財課 市史編さん室

〒四七一一〇〇七九 豊田市陣中町一―一九―

TEL 〇五六五―三六―〇五七〇

FAX 〇五六五―三一―〇一六二

E-Mail: shishihensan@city.toyota.aichi.jp